

今号から毎号にわたり第45代海上保安庁長官、岩並秀一さん(63)の回顧エッセイ「海の事件簿」を連載します。岩並さんは昭和56(1981)年海上保安大学校卒。海上保安監などを経て平成30(2018)年7月、長官に就任し、一昨年1月まで務めました。数々の重大事件・事故などに直面した体験談を、貴重なエピソードとともに振り返ります。

(編集部)

山林火災の住民救助



僚から思われていたかもしれません。本欄においては、そのような在職中の出来事や教訓などを綴ってみたいと思います。

海上保安官の中には、不思議と大きな事件・事故によく遭遇する者として、多い者がいます。海上保安庁在職中の私は間違いなく前者であり、「あいつと同じ部署にいと危ない」と同じ日はフェーン現象による西

昭和56(1981)年12

月、海上保安大学校専攻科研修を終えて最初の赴任地は八戸海上保安部の350

ト型巡視船「あぶくま」の次席通信士でした。乗船勤務にもだいぶ慣れた昭和58

(1983)年4月、その日はフェーン現象による西

巡視船で28人をピストン輸送

の強風が吹くことが予想され、「あぶくま」は海難発生に備えて岩手県の大久慈湾で荒天待機していました。予想通り船橋の風速計の針が30び付近を上下するようになった頃、突然目の前の山の手で火の手が上がり、西風に煽られて見る見る間

に半島部の山林が海に向かって燃え広がったのでした。NHKドラマ「あまちゃん」の舞台にもなったその周辺は、山林の裾を海岸に沿って一本道が通じているような場所です。これは消防も大変だと思いつつ、八

戸海上保安部に連絡すると、「火勢が強く、沿岸の道路に消防車両が入れない。貴船は沿岸住民の救助にあたれ」という思いもよらない指示が飛んできました。船橋での通信担当であった私自身は搭載艇に乗って現場に向かうことはできませんでしたが、現場の消防機関と直接連絡が取ることができれば、もう少し円滑に救助作業が行えたのではないかとこの教訓を得ることとなりました。大雨災害や地震災害等で陸上での災害対応に海上保安庁が出勤する事案も増えています。日ごろから、警察、消防などとの関係機関との良好な関係構築や連絡手段の確保が不可欠です。

上 景 安 新 聞 (昭和24年5月10日第三種郵便物認可)

海上保安新聞

久慈市での山火発生に、5隻、2機が救援出動

海岸に避難の28人救出

八戸保安部に対策本部

久慈大火を報じる本紙1983年5月5日付の一面。巡視船艇5隻、航空機2機が出動した

日本光機工業株式会社

16日から開演

くま」は搭載艇を降下し、岩礁に乗り揚げないよう沿岸を縫うようにして捜索すると、海岸沿いの集落の住民の方々が火の粉の舞う中で海岸に避難して、救助作業中、海岸で待つ住民の方を安心させるため、乗組員の1人を海岸に残しながら、住民28人をピストン輸送して全員救助したのでした。

久慈大火と呼ばれ、激甚災害にも指定されたその山

(第45代海上保安庁長官) 二つづく